様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２７７５

研究課題名（和文）日本語現場指示詞の方言差の解明

研究課題名（英文）Dialectal Differences in the Japanese demonstratives of the exophoric use

研究代表者
堤　良一（Tsutsumi, Ryoichi）

岡山大学・社会文化科学学域・准教授

研究者番号：８０３２５０６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　日本語の現場指示用法について、方言差があるのではないかという仮説を検証するための研究であった。前半は集中的に各地で実験を行ったが、コロナ禍により中断を余儀なくされた。しかし、前半の実験により多くの成果が得られた。まず、指示詞の選択が方言によるかどうかについては未だはっきりしたことは言えない。しかし一方で、話者の対象に対する好悪などの感情的な態度や、共同注意概念が影響を及ぼす可能性を示唆した。
　後半は理論的な考察へと課題をシフトさせた。平田（2020）の論考では自然会話の収録により多くの知見を得ているが、この結果が我々の実験の結果とどのように異なるかについては今後引き続き検討する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により、指示詞の地理的変異に注目する端緒を開いた。これは我々の空間認知と日本語の文法が一様ではなく、様々な外的な要因や話者の心理的な状態によって変化することを明らかにした結果であると言えよう。今後は、共同注意概念を用いた理論との比較検討や、歴史的なさらなる考察を通じて、より正確な指示詞の使用の実態、ひいては人間の空間認知の問題に対する検討がなされるべきである。本研究はこの問題に対する重要な示唆を行ったものと位置づけられる。

研究成果の概要（英文）：　The study was designed to test the hypothesis that there may be dialectal differences in field-directed usage of Japanese. The first half of the study was conducted intensively in various locations, but had to be interrupted due to the corona disaster. However, the first half of the experiment yielded many results. First, it is still not clear whether the choice of demonstratives depends on the dialect. On the other hand, the results suggest that the speaker's affective attitude toward the target, such as liking or dislike, and the concept of joint attention may be influential.
　In the latter half of the period, we shifted the issue to theoretical considerations. Hirata(2020) provides a number of findings from the recording of natural conversations, but it remains to be seen how these results will differ from our experimental results.

研究分野：日本語学

キーワード：指示詞　現場指示用法　方言　共同注意　好悪　評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

指示詞の現場指示用法においては、コは話し手の近く、ソは聞き手の近く、あるいは話し手から近くも遠くもない距離、アは話し手からも聞き手からも遠い場所を指すというのが常識的な理解とされ、それ以上のことはほぼ顧みられることはなかった。そんな中、高橋太郎氏はいくつかの論考で、ソが聞き手の周りを指示していたのが、年代が下るにつれ、話し手と聞き手の距離が離れれば、アで指示されるようになってきていることを実験により明らかにした。しかし、高橋氏の研究は首都圏方言話者に限定されたものであった。そこで、堤（2010）、岡﨑（2010）は、中国地方（岡山市とその周辺）方言話者に対して、同様の実験を行い、その結果、この方言の話者は高橋氏が観察したものよりもより顕著に聞き手の周りをアで指す傾向があることを示唆した。

２．研究の目的

このような流れの中、本研究は同様の実験を各地で行うことにより、現場指示用法の地域間での方言差を明らかにすることを目的とした。指示詞においての方言差は、特に現場指示用法においてはほとんど問題にされることはなかったし、どの方言においてもほぼ同じように使用されているというような暗黙の了解があった。本研究により、指示詞の方言差が明らかになれば、指示詞研究全体への貢献がなされると考えた。

３．研究の方法

前述の高橋太郎氏が考案した方法を前半では用いた。後半はこれらの方法に少々の変更を加えた。具体的には次のような点を修正している。

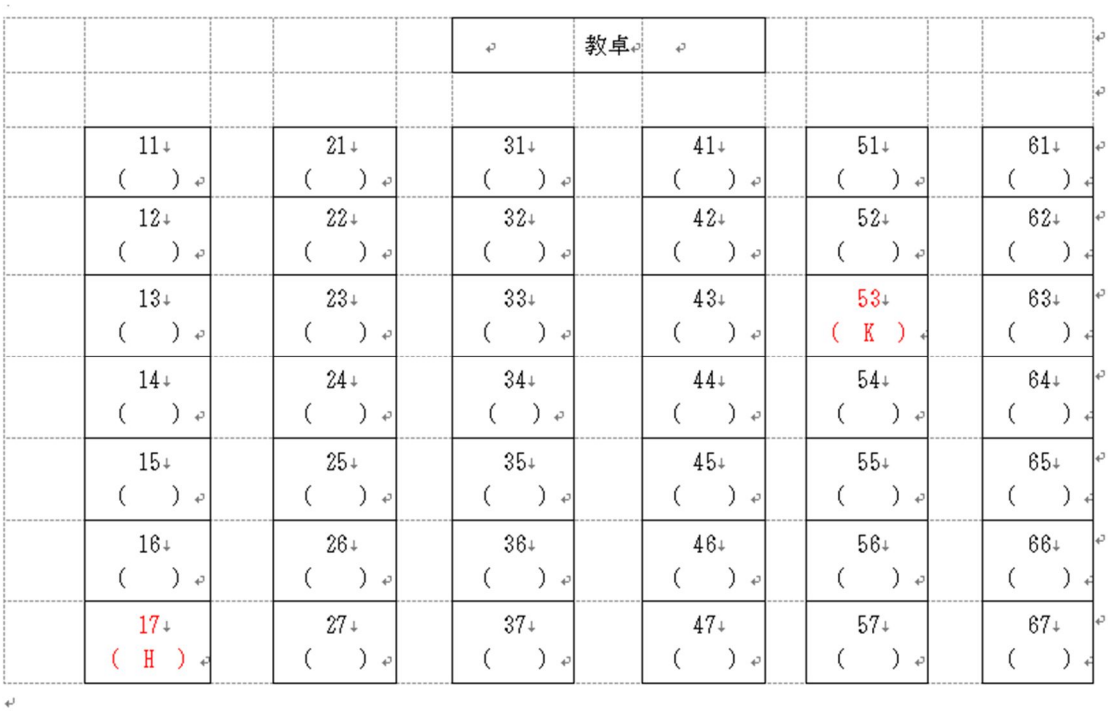
1. 話し手の着席位置
   できる限り距離を離した場合に、どのような指示の仕方がなされるかを見るために、教室内で距離が最もとりやすい位置、具体的には教室の隅に話し手が着席するようにした。

2. 聞き手の着席位置
   聞き手の後ろ側を指す場合に、方言差がある可能性が指摘されていたために、聞き手の着席位置よりも後ろ側に、指示対象を置き、指せるように実験方法を修正した。

3. 指示対象の統一
   指示対象の大小、形状等で指示の仕方に影響が及ぶことのないように、すべての指示対象をクリアファイルとした。

4.　指示対象の配置

教室内にまんべんなく配置するようにした。下図参照。



5.　指示を聞き手が出す（高橋法）か、話し手が出すか（堤法）

高橋法では指示は聞き手が出していた。すなわち、「○○さん（話し手の名前）△△はどれですか」のように。この方法に加えて、本研究では、指示を話し手が出す場合、つまり、唐突に話し手が、「○○さん、△△を見てください」「どれですか？」「これ／それ／あれです」のような場合を実験内容に入れた。これは平田(2014)の、指示詞の選択に共同注意の確立が関わるとした主張を確かめるために行った措置である。

４．研究成果

研究の遂行段階において、コロナ禍に入り、対面での実験を行うことができなくなった。そのために、本研究は最終的な結論を出すことができないままであった。しかし、研究期間内には次のような成果が得られた。代表的なものをいくつか挙げる。

堤良一(2018)「直接経験が必要ない記憶指示のアノ」岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）(2018)『バリエーションの中の日本語史』139-156,くろしお出版

岡﨑友子(2018)「現代語・中古語の観念用法「アノ」「カノ」」岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）(2018)『バリエーションの中の日本語史』119-138,くろしお出版

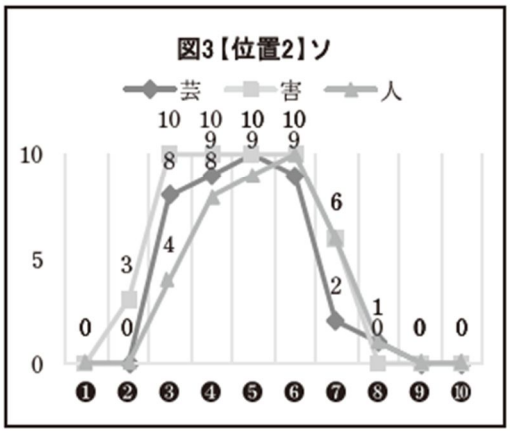
藤本真理子(2018)「中古のカ（ア）系列とソ系列の観念指示用法―古典語における知識の切り替わりから―」岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）(2018)『バリエーションの中の日本語史』103-118,くろしお出版

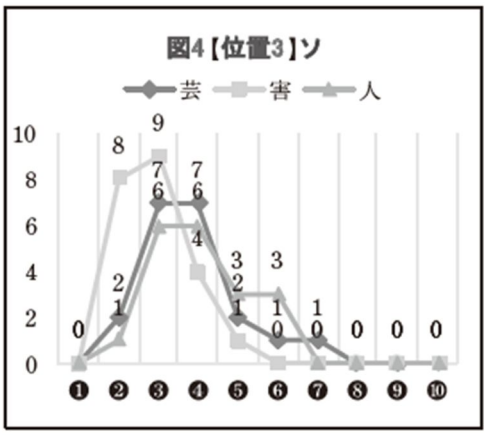
この３編の論文は、現場指示用法のものも含めて、指示詞に話者の、指示対象に対する感情・評価的な側面が反映されることを明らかにした。特に堤(2018)では、長崎市において調査を行っている。方言に関して調査したものであり、長崎方言においては直接経験がなくてもアノが使用されることを調査によって明らかにしている。しかし、この傾向は首都圏方言話者にも見られることが論じられており、調査に使用したデータセットでは、長崎方言と首都圏方言の間に差は見られない。一方、長崎方言話者に対するフォローアップインタビューにおいては、対象への好き／嫌いといった感情が、指示詞のソとアの使用に影響を与えるという直感を持つ話者がいることが指摘されている。岡﨑(2018)も作例によって、ソの使用と、興味・関心の薄さのようなものが連動することが指摘されている。藤本(2018)は、歴史資料から、日本語の指示詞においては、感情・評価が指示詞の使用に影響を及ぼす可能性を示唆したものである。

岡﨑友子(2020)「現代日本語の指示詞コソアの指示領域」『文学論叢』94:140(1)-124(17),東洋大学

上記の研究と同様に、この研究では、現場指示用法において、指示対象への好悪が指示詞の選択に影響を及ぼすことを実験に酔って明らかにした。本研究では、話し手と聞き手を、いくつかの異なる位置に立てせて実験を行っているが、そのどちらの場合でも、「害」と表記されている、害虫を指示する場合には、それ以外の対象（「芸」は芸能人、「人」は友達など）を指すよりも、ソが現れる位置が手前にずれ込むことが指摘されている。上記 3 編の論文と合わせて、重要な指摘である。

4.1 【第 2 ：害】指示対象「好ましくないもの（害虫等）」（ソコ）





堤良一・岡﨑友子(2022)「心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について」『言語研究』161：91-117,日本言語学会

コロナ禍になって、本研究課題が目指した実験的な手法を用いた研究ができなくなったことで、我々は過去に収集したデータをもとに、日本語の指示詞を再度具に検討することができた。その中で、「そうだ！　京都行こう」のような、これまで例外として詳しく扱われてこなかったような用法の中に、「基準指示用法」として抽出できるような共通点を見出した。本論文では、そのことを理論的に証明し、かつ歴史的な考察を加えて、この用法が、日本語の指示詞の使用の中に、古くから連綿と存在してきたことを実証した。

その他、次の 3 編は、本研究課題の成果を含めた形で、日本語学界の展開について論じたものである。

岡﨑友子(2019)「指示詞からみる文法史」『日本語学』38-4：12-21
岡﨑友子(2020)「学界の展望」『日本語の研究』16-2：21-28，日本語学会
堤良一(2022)「日本語文法学界の展望(2018-2020) 現代語」『日本語文法』22-1：171-179,日本語文法学会

以上のように、本研究課題による成果は、直接的な方言差の完全な解明には至らなかったものの、実験・調査の中で副次的に見えたことは多く、まだまだ指示詞研究の中でやり残されたことが多いことがわかった点で意義がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計33件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 堤 良一、岡﨑 友子	４．巻 161
２．論文標題 心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 言語研究	６．最初と最後の頁 91～117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.161.0_91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 98－12
２．論文標題 上代の指示代名詞について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 50-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 116，117
２．論文標題 データからみる中古の指示代名詞	５．発行年 2022年
３．雑誌名 語文	６．最初と最後の頁 72-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹内史郎・松丸真大	４．巻 0
２．論文標題 本州方言における他動詞文の主語と目的語の区別について―京都市方言と宮城県登米町方言の分析―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『日本語の格表現』	６．最初と最後の頁 65-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 0
2．論文標題 「日本語指示詞の変容―聞き手の存在と結びついた「そ」―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『日本語の歴史的対照文法』	6．最初と最後の頁 137-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 11
2．論文標題 「パロディーとは―『浮世風呂』を例に似ているということを考える―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『尾道市立大学地域総合センター叢書』	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 0
2．論文標題 「地域の会報にあらわれる方言談話―『三訪会会報』広島県尾道市三成地区を中心に―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『談話会会報』	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堤良一・岡﨑友子	4．巻 161
2．論文標題 「心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 言語研究	6．最初と最後の頁 91-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.161.0_91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 堤良一	4．巻 22-1
2．論文標題 「日本語文法学界の展望（2018～2020）現代語」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本語文法	6．最初と最後の頁 171-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡﨑友子	4．巻 16-2
2．論文標題 「特集2018年・2019年における日本語学会の展望　文法（史的研究」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語の研究	6．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 第11号
2．論文標題 「地域のことばはどのようにして残るか―『三訪会会報』を資料のひとつに―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『尾道文学談話会会報』	6．最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 第20号
2．論文標題 「学科専門教育課程における「学びのプラットフォーム」構築の試み―学修データベースの構築と活用可能性に着目して―」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『尾道市立大学芸術文化学部紀要』	6．最初と最後の頁 pp.136-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 38－4
２．論文標題 指示詞からみる文法史―内省の効かない古代語を研究対象とする―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 73
２．論文標題 現代日本語の指示詞コソアの指示領域	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文学論叢	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤本真理子	４．巻 1
２．論文標題 学界展望　日本語の歴史的研究 2018.7-2018.12	５．発行年 2019年
３．雑誌名 花鳥社	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹内史郎・松丸真大	４．巻 1
２．論文標題 京都市方言における情報構造と文形態―格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 くろしお出版	６．最初と最後の頁 67-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 4
２．論文標題 「指示詞＋助詞」による文連接の一考察―現代語・中古語コーパスの対照から―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『日本語文法史４』	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 なし
２．論文標題 現代語・中古語の観念用法「アノ」「カノ」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『バリエーションの中の日本語史』	６．最初と最後の頁 119-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡﨑友子	４．巻 なし
２．論文標題 「頃」の用法と歴史的変化―現代語・中古語を中心に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『形式語研究の現在』	６．最初と最後の頁 75-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 堤良一	４．巻 なし
２．論文標題 直接経験が必要ない記憶指示のアノ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『バリエーションの中の日本語史』	６．最初と最後の頁 139-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 睦宗均・堤良一	4．巻 115
2．論文標題 第二言語習得と普遍文法の利用可能性－束縛理論を中心に－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『日本學報』	6．最初と最後の頁 66-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長谷川哲子	4．巻 11号
2．論文標題 経験を語る談話における接続詞使用 ―「そして」の使用について―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『エクス言語文化論集』第11号	6．最初と最後の頁 101-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松丸真大	4．巻 なし
2．論文標題 関西方言における名詞・形容動詞述語否定形式ヤナイ・ヤアラヘン・トチガウの諸用法	5．発行年 2018年
3．雑誌名 藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』	6．最初と最後の頁 443-462
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松丸真大	4．巻 なし
2．論文標題 甑島里方言の文法概説	5．発行年 2018年
3．雑誌名 鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相	6．最初と最後の頁 121-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 なし
2．論文標題 「中古のカ（ア）系列とソ系列の観念指示用法―古典語における知識の切り替わりから―」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『バリエーションの中の日本語史』	6．最初と最後の頁 103－118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 なし
2．論文標題 「指示副詞の形式と意味―古典語・甑島方言を通して」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『鹿児県甑島方言からみる文法の諸相』	6．最初と最後の頁 229－248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小林雄一郎・岡﨑友子	4．巻 13
2．論文標題 中古における接続表現の統計的分析―指示詞を構成要素とするものを中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 国立国語研究所論集	6．最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹内史郎・岡﨑友子	4．巻 14
2．論文標題 日本語接続詞の捉え方―ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国立国語研究所論集	6．最初と最後の頁 241-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 2
2．論文標題 現実世界の対象を表さないソの指示―歴史的変遷をとおして―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『語用論フォーラム2』、ひつじ書房	6．最初と最後の頁 155－178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤本真理子	4．巻 17
2．論文標題 日本語指示詞の複合形式にみられる問題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『尾道市立大学芸術文化学部紀要』尾道市立大学	6．最初と最後の頁 177－181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松丸真大	4．巻 15
2．論文標題 古仁屋方言の名詞述語否定形式アラン・ジャネンとその派生用法	5．発行年 2017年
3．雑誌名 阪大社会言語学研究ノート	6．最初と最後の頁 72-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　4件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 長谷川哲子
2．発表標題 説明タスクでの接続詞使用－読み手評価から見た接続詞の選択－
3．学会等名 JALP10周年記念シンポジウム（日本語プロフィシェンシー研究学会）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 堤良一
２．発表標題 「確定性・指示性と評価的意味」
３．学会等名 日本言語学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 堤良一・閻琳
２．発表標題 「聞き手」としての非母語話者の容認性判断
３．学会等名 JALP10周年記念シンポジウム（日本語プロフィシェンシー研究学会）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 堤良一
２．発表標題 「基準指示用法について」
３．学会等名 淡江大学日文系（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤本真理子
２．発表標題 「呼びかけの助詞「ヨ」の変遷―返事を期待しない働きとその特徴―」
３．学会等名 尾道市立大学日本文学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡﨑友子
２．発表標題 現代語コソアの指示について
３．学会等名 日本語文法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 堤良一・岡﨑友子
２．発表標題 心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について
３．学会等名 土曜ことばの会
４．発表年 2020年

１．発表者名 堤良一
２．発表標題 初級レベルのコミュニケーション教育 ―コミュニケーションを重視すると初級の教育はどう変わるか？―
３．学会等名 第34回上智大学言語学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 堤良一
２．発表標題 個人差とキャラクタのプロフィシェンシー
３．学会等名 第1回日本語プロフィシェンシー研究学会国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡﨑友子,渡辺由貴,宮内佐夜香,橋本行洋
２．発表標題 日本語史研究とコーパス活用―その利点と注意点―
３．学会等名 日本語学会2018年度春季大会ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 堤良一・睦宗均
２．発表標題 普遍文法と第二言語習得の関連性―束縛理論を中心に―
３．学会等名 韓国日本学会第96回国際学術会議（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 堤良一・朴秀娟
２．発表標題 「裸の助詞の出現可能性に関する日韓の相違について」
３．学会等名 韓国日本語学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Michio MATSUMARU
２．発表標題 Interpreting Linguistic Maps Using GIS: A Case from Shogawa River Basin Area in Toyama
３．学会等名 Komatsu Round-Table Conference on Geo-linguistics: Interpretation of Linguistic Maps（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤本真理子
２．発表標題 「古典語・現代の文脈指示と文体」
３．学会等名 国立国語研究所プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡﨑友子
２．発表標題 指示表現＋助詞」による文連接の一考察
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡﨑友子
２．発表標題 『日本語歴史コーパス』を利用した中古の感動詞研究
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」
４．発表年 2018年

１．発表者名 松丸真大
２．発表標題 関西方言の否定形式ナイ・アラヘン・チガウの諸用法
３．学会等名 日本語文法学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹内史郎
２．発表標題 格標示とイントネーション京都市方言の分裂自動詞性再考
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

１．著者名 堤良一	４．発行年 2022年
２．出版社 凡人社	５．総ページ数 208
３．書名 いい加減な日本語	

１．著者名 岡﨑友子・堤良一・岩田美穂・松丸真大・藤本真理子・深澤愛・森勇太・長谷川哲子	４．発行年 2017年
２．出版社 ココ出版	５．総ページ数 225
３．書名 ココが面白い！　日本語学	

１．著者名 真田信治監修、岸江信介・髙木千恵・都染直也・鳥谷善史・中井精一・西尾純二・松丸真大編	４．発行年 2018年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 501
３．書名 関西弁辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡崎　友子 (Okazaki tomoko) (10379216)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	
研究分担者	藤本　真理子 (Fujimoto Mariko) (10736276)	尾道市立大学・芸術文化学部・准教授 (25405)	
研究分担者	長谷川　哲子 (Hasegawa Noriko) (20368153)	関西学院大学・経済学部・准教授 (34504)	
研究分担者	松丸　真大 (Matsumaru Michio) (30379218)	滋賀大学・教育学部・教授 (14201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関